伊勢湾海洋調査実習を終えて

質問 浅井さんは1年生の時から毎年参加しているそうですが、伊勢湾の環境をどのように感じていますか。

浅井 水は濁り、ヘドロも多いことから、魚が住めるのかなと思ったのが第一印象でした。ベントス調査（海底生物調査）では死んだ個体が多く、生物が減っていくのを目の当たりにしている感じです。昔の豊かな伊勢湾を取り戻せたら良いなと思っています。

質問 平野さんは初めて参加してみてどうでしたか。

平野 まず感じたのは、海での調査は大変だということです。今回は、1日目に4地点、2日目に7地点を調査しましたが、体力と精神力が必要でした。また、観測機器の取り扱いや観測方法など、勉強になる点が多くて、もっと早くから参加しておけば良かったと思いました。

質問 浅井さんは伊勢湾の海岸のマイクロプラスチックを卒業研究のテーマとしているそうですが、どんなことが分かってきましたか。

浅井 海岸毎や、同じ海岸の中でも、種類や量に大きな違いのあることが分かっています。いろいろな種類のマイクロプラスチックがあり、多くの海岸を調査して、発生源の手がかりを得られればと考えています。

質問 平野さんは答志島で海岸清掃を行う「22世紀奈佐の浜プロジェクト」の学生部会のリーダーということですが、どのような活動を行っているのですか。

平野 毎年10月に行われる清掃活動後に、学生だけで環境問題について考える会を企画運営しています。また、アマモの種取りやSDGsカードゲーム体験などの環境イベントに参加したり、「いい川・いい川づくりワークショップ」の全国大会に参加したりしています。学生組織を継続することと、プロジェクトの活動を全国に伝えることを目標にしています。

質問 最後に、伊勢湾の環境を良くするために、みなさんに伝えたいことはありますか。

浅井 魚を食べられることが普通だと思っている人や、海洋ゴミ問題を自分には関係ないと思っている人も多いと思います。海岸の清掃活動に参加した事をきっかけに、自分は考えが変わりました。伊勢湾には様々な問題がありますが、それを実感するためにも、多くの人に海岸清掃に参加して欲しいと思っています。

平野 伊勢湾は深刻な環境問題を抱えています。実習の時も漂流ゴミが沢山見られました。貧酸素水塊やマイクロプラスチック問題などでも、一人ひとりに出来ることはあります。他の大切な誰かのことを少しでも考えて行動することができたら、環境は徐々に変わってくるのではないかと思っています。

《マイクロプラスチックの分類作業》

まずサイズ別に分画します。海岸のマイクロプラスチックについては、1㎜以下はカウントせず、1～2㎜、2～3㎜、3～5㎜のように分画しています。その後、種類別に区分します。肥料のプラスチック被覆、レジンペレット、発泡スチロール片、硬質プラスチック片のように区分します。さらに、必要に応じて赤外線を用いた装置（FT-IR）でプラスチックの種類を調べます。

●千葉教授からメッセージ

プラスチックは人類が生み出した夢の素材です。日常品から、農林水産、医療、航空宇宙分野などで幅広く使われ、我々の生活を便利にしてくれています。3Rは大切ですが、不要になったプラスチックを適切に管理することはさらに大切です。私たちの意識を高めて、ポイ捨てや不法投棄をゼロに出来ればと考えています。若い人が中心となり、そのような社会を目指しませんか。

地上のものは全て海にたどり着くと言われます。人の英知と努力により自然に勝る強さを持ったプラスチックが生み出され、その管理は、私たち人間にしかできず、義務でもあります。

伊勢湾の危機に、今後の人間活動がさらに追い打ちをかけることにならないよう、一人ひとりができることを実行していきたいものです。

写真・資料提供　千葉　賢　教授